

「直腸癌の経肛門吻合患者における術後の排便を主とする機能障害の後方視的検討」

に関するお知らせ

【研究課題名】

直腸癌の経肛門吻合患者における術後の排便を主とする機能障害の後方視的検討

【研究の背景および目的】

直腸癌に対する肛門の温存は、歴史的にみても大腸肛門外科領域において大きな課題でありました。医療の進歩とともに最近では多くの直腸癌に対して肛門の温存が可能となっています。さらに肛門近傍の癌に対しても本邦では2000年ごろから究極の肛門温存術式として肛門の内括約筋を一部切除して経肛門的に腸管を吻合(つなぐ)して肛門を残す内括約筋切除術 (ISR : intersphincteric resection)が海外から導入され、急速に普及し今日に至っています。しかしながら、直腸癌に伴う直腸の切除では、一般に直腸の便貯留能の低下、手術に伴う骨盤神経、括約筋や肛門拳筋への障害などの理由から術後 LARS (low anterior resection syndrome)と称される頻便、soiling、失禁、便意逼迫などの症状が必発してくる問題がありましたが、見過ごされてきた経緯があります。本研究の目的は、直腸癌術後に発生してくる排便を主とする機能障害の程度と患者さんの日常生活への影響をカルテ記録から遡って調査し、直腸切除の影響がどのように経時的に変化していくのかその実態を調査するとともに、その結果をもとに術後の排便習慣の変化等に悩む患者さんへの対応の一助にすることです。

【研究対象および方法】

この研究は、東邦大学医療センター大森病院倫理委員会の承認を得て実施するものです。2000年1月～2020年12月の間に当院で経肛門的吻合を行って肛門温存術を実施した患者さんを対象にカルテ記録から排尿や排便に関する機能障害、排便については便の性状、排便障害の程度（排便回数、便とガスの識別、失禁の有無、便意の逼迫の有無、満足度、日常生活への影響、精神への影響など）の調査を行います。今回の研究で得られた成果は、医学的な専門学会および専門雑誌などに報告することができますが、個人を特定できるような情報が外部に漏れることは一切ありません。本研究に関して質問のある方、診療情報を研究に利用することを承諾されない方は、下記までご連絡ください。

【連絡先・担当者】

東邦大学医療センター大森病院

一般・消化器外科 教授 船橋公彦

電話：03-3762-4151 内線：6530